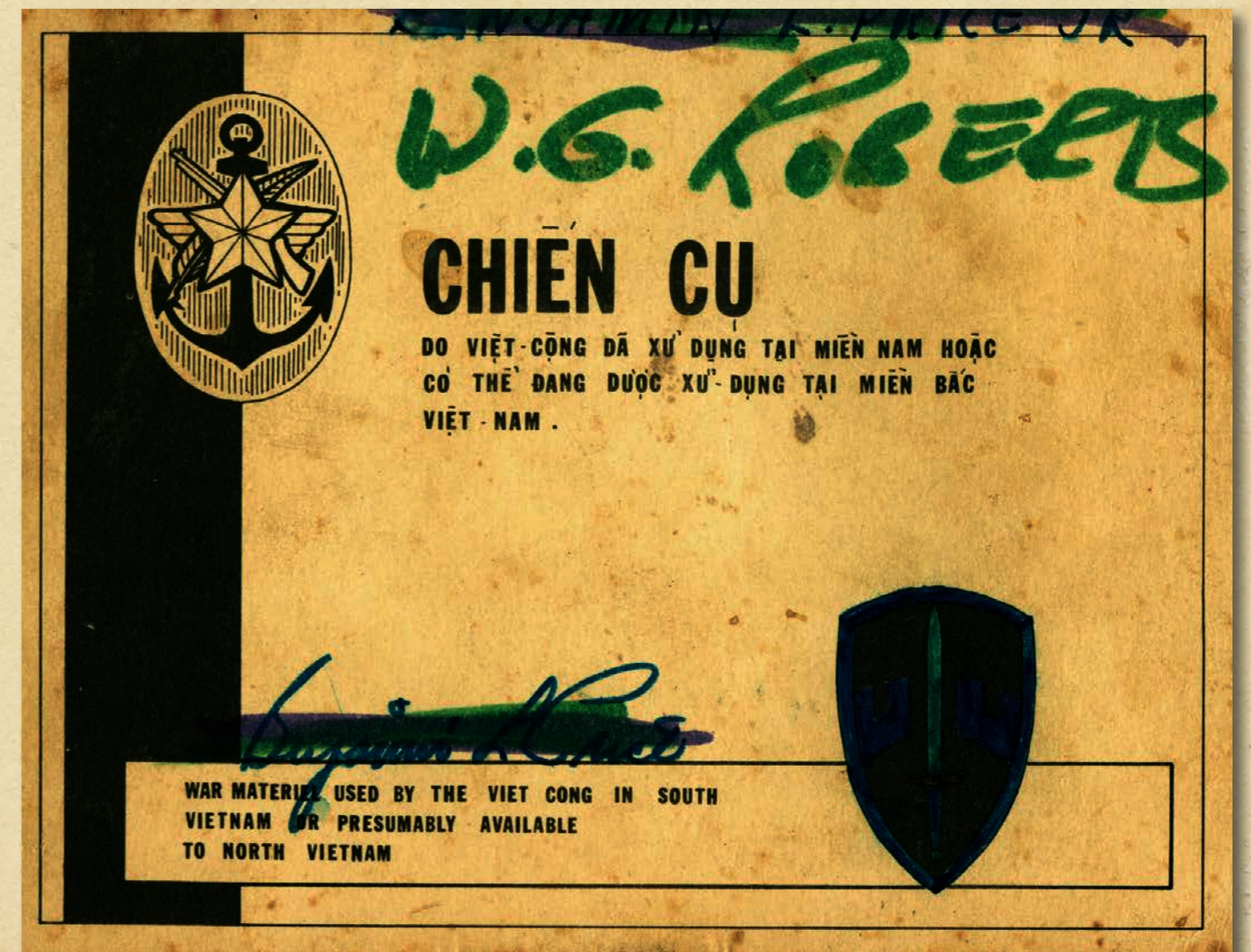


「赤い星組」の兵器と軍装

南ベトナム軍およびアメリカ軍の マニュアルに見る ベトナム共産軍の兵器と軍装

ここに南ベトナム軍とアメリカ軍によってまとめられた共産軍の兵器と軍装に関するマニュアルがある。
第二次大戦時代のボルトアクションライフルから手製の手榴弾、新鋭のロケット砲、さらには北ベトナム軍の制服や記章まで記された
このマニュアルは非常に資料性が高いのだがきわめて入手困難で、目にする機会はなかなかない。
今回は184ページあるマニュアルの中でとくに興味深い部分を抜き出し、新たに解説を書き加えたダイジェストとしてお送りする。

構成/コンバットマガジン編集部



VIET CONG HAND GRENADE, MISCELLANEOUS TYPES

The hand grenades shown on the opposite page are examples of the numerous types manufactured by the Viet Cong in South Vietnam. These grenades are not described individually in this handbook because of their lack of standardization. They are manufactured in relatively small munitions plants and vary considerably in their technical characteristics, reliability and performance. Because of their lack of standardization, extreme care should be used in handling these grenades.

The recent modernization of the arms and munitions used by the Viet Cong has not significantly reduced their use of locally produced grenades. These grenades continue to find wide employment by the Viet Cong.

マニュアルに描かれた解放戦線の手製手榴弾。オリジナルのキャプションでは「南ベトナム国内で作られたこれらの手榴弾には共通する規格がなく、取り扱いには細心の注意を必要とする」と記されている。主に不発弾や直撃した爆薬から作られたこの種の手榴弾は実際に信頼性が不十分で、正しく扱っていないがら負傷する解放戦線のゲリラや、目の前に投げつけられながら不発に終わって命を失うアメリカ軍兵士が続出した。



UNTOLD SEAMAN BLUES

写真と語り／木村 守 (元LST乗組員)
文／吉野文敏 構成／編集部

【第6回】

まだ語られていない
LST船員の記録

目の前まで行きながら上陸できなかった
濟州島行きからスタートした3回目の航海。
しかし、この航海で木村さんが撮った写真は
他の航海と比べるとずいぶん少ない。
米軍が本格参戦して2年目が過ぎようとしていた。
ベトナム戦争は長期化、激戦化の様相を呈していた。

クイニョンの教会で何かの催しがあった。白いアオザイは学生さんや若い人が着ていたが、珍しいサングラス姿の子が目をついた。

US NAVY PATROL AIR CUSHION VEHICLE

ベトナム戦争 PACV メコンデルタの バックビークルは 水陸両用の モンスター

まるで、できそこないのパンケーキそっくりである。船のようでもあるし、滑空する飛行機のようなものもある。生まれはイギリスだ。ウエストランド・エアクラフト社が組み立てたエアクッションビークル、ACVである。それをパトロール仕様にしたのがPACV、「バックビークル」である。1966年11月20日「キーバット作戦」を開始した。キーバットとはベトナム語で「怪物、モンスター」の意味である。作戦を進める日々のなか、脅し模様のシャークフェイスをペイントした。

構成/コンバットマガジン編集部
訳/河村喜代子

大きな戦闘が続いているなかでは、小規模でユニークな部隊というのは、その存在が、記憶から抜け落ちてしまう傾向がある。時にそうした小さな部隊が、重要な教訓を与えてくれている。第39騎兵小隊は、まさにそれである。この部隊はエアクッション艇、ACV (Air Cushion Vehicle) を操船した部隊である。ACVはその後、いくつもの改良を重ねられて、現行のモデルはより使いやすく、優れた船となって現在のバトルフィールドに投入されているとおりである。そこで第39騎兵小隊の歴史を記録しておくことは重要である。将来の設計者たちが、いかにACVのテクノロジーが、陸軍の作戦に導入されたのかを知ることができれば、将来の作戦立案の改善に役に立つ可能性がある。

1960年代に3艇の陸軍SK-5 ACVに対して、南ベトナムのメコンデルタで、武器として使いものになり得るかの評価テストが行われた。その評価担当を命じられたのは、騎兵部隊のクルーたちであった。彼らには3つのグループがあり、与えられ

た任務も3種類あった。

●ACVの操船適応力とメンテナンス特性を評価する。

●ACVの戦闘能力と潜在能力を評価する。

●より大規模なACV部隊を編成することが可能であるかを評価する。それができる柔軟性があるか、またそれに応じた部隊編成の提言を行なう。

1968年以前に、ACVの実戦経験は2回しかなかった。

1度目は、1965年3月にボルネオにおいて、インドネシアの即応部隊によるものである。この部隊は、イギリス軍のインターサービス・ホバークラフト実験部隊に所属し、SR.N5sの艇を使用した。

2度目は、後に米陸軍のACVプログラムと合同で行なわれた時のもの。これは米海軍のPACV、通称バックビークル (Patrol Air Cushion Vehicle) が、ベトナムで1966年~69年にかけて行ったものである。PACVすなわちパトロール・エアクッション艇によるディビジョン107は、後に沿岸ディビジョン17として、3艇のSK-5を



Militaria Roundup!

大容量ミリタリー・バッグ

ミリタリー・バッグには時代、そして国別に多くの種類が存在する。ミリタリー・コレクションとしては野戦用装備のバッグが主流だが、それ以外にも衣類と装備の保管や移動時に使用されるバッグも数多く存在する。今回の『Mirataria・ラウンドアップ!』では地味な部類に属する大容量のミリタリー・バッグを紹介しよう。

解説/菊月俊之 写真/青木健格 撮影協力/サムズミリタリー屋 <https://www.sams-militariya.com>、PKミリタリア <https://margarate.militaryblog.jp>、MASH ☎06-6567-3312 <http://www.mash-japan.co.jp>、中田商店☎03-3823-8577 <https://www.nakatashoten.com/>

兵士と荷物とバッグ

引っ越しを経験した方はお判りと思うが、人間の移動には実に手間がかかる。それは人だけでなく、さまざまな荷物と一緒に移動しなければならないのが理由。これは軍隊も同様で、部隊の移動の場合は大から小までさまざまな装備を軍の規定にしたがって梱包しなければならない。

兵士個人の場合は支給された装備を移動用のバッグに詰め込むのだが、兵士個人に支給される装備の数は案外と多い。第2次大戦中の1945年発行のアメリカ陸軍支給装備の定数表TE (Table of Equipment) No.21を見ると、アメリカ国内駐屯の下の士官兵に支給される装備は衣類が35種、個人装備が21種で、これに指揮官の裁量で追加支給されるアイテムが20種加わるといった具合。移動時には一部の装備を返納し、移動先の補給所で新たに装備(新品とは限らない)を受け取るのが一般的だが、それでも数が多いことに変わりはない。

そして移動時に使用されるのが大容量のバッグで、戦争映画でも、転属してきた兵士がそうしたバッグを抱えて来るシーンが見られる(たとえば『砲艦サンパブロ』(67年)、『地上より永遠に』(53年)、『戦場』(49年)などで、共にDVD化されている)。というわけで、今回の特集では主にアメリカ軍が使用した大容量のバッグを紹介しよう。

アメリカ陸軍ダッフル・バッグ BAG,DAFFEL(U.S. ARMY)

ミリタリー・バッグにはさまざまな種類が存在するが、その中で一般にも認知度が高いのがダッフル・バッグだ。1945年版アメリカ陸軍マニュアルFM21-15には「ダッフル・バッグは大型の丈夫なコンテナで、簡単に運搬が可能。バック(背囊)に収まらない衣類のすべてを収納する」と記されており、第2次大戦から現在まで使用が続けられている。

ダッフル・バッグの名前の由来は明確ではないが、“ダッフル”はベルギー フランデース地方の町ダッフェルから来たもので、17世紀には起毛した厚手のウール生地の名前として使用されるようになった。そしてダッフル・バッグの名前が登場するもっとも古い文献は1768年のものという。同じくダッフルの名前を冠したオーバーコートが漁師、そして海軍の防寒衣となったのはご存じの通り。そしてダッフル・バッグも海軍由来のようで、アメリカ海軍では衣類や装備を収納保存する入れ物として1812年の米英戦争時に円筒形の布製バッグを導入。同様のものが“シー・バッグ(Sea Bag)”の名前で現在も使用中だ。

アメリカ陸軍がダッフル・バッグを採用したのは第2次大戦中の1943年で、従来のバラック・バッグ(後述)に代わるものとして導入されている。資料の中には41年頃にアメリカ海兵隊が同様のバッグを導入しているとあり、陸軍のダッフル・バッグはそれを真似た可能性もある。



兵士が別の基地に移動、あるいは海外展開する場合にはすべての装備を運ばなければならない。その際に使用されるのが大容量のバッグだ。写真は部隊移動のため兵士たちの荷物入れたキット・バッグを輸送機に積み込むアメリカ空軍の兵士。扱いは荒っぽいのは軍隊流だ。(Photo: U.S.A.F.)

マーキング

バッグの口の内側にスタンプで入れられたマーキング。製造年とメーカー名だけのシンプルな内容で、後述するバラック・バッグのように補給部のタグは付かない。



内側のフラップ

バッグ内側には長さ28、幅26cmのフラップが付くが、これはフックとアイレットの隙間から浸入する雨などから収納物を保護するためのもの。より堅固が防水が必要な場合は後述する防水クロージング・バッグを使用する。



ダッフル・バッグに荷物を詰め終えたら、フラップを封筒のように折り返す。アイレット(はと目)をU字型のフックに被せ、キャリング・ストラップのスナップ・フックで閉じる。1945年版の陸軍マニュアルFM21-15には「南京錠は官給品に含まれないが、内容物の安全(盗難防止)のため使用できる」と記述されている。



マーキング

バッグ内側にプリントされたマーキング。名称と連邦ストック・ナンバー(FSN)、そしてメーカー頭文字(?)と“U.S.A.”のシンプルな表記。現用ダッフル・バッグのマーキングにはこれ以外にも表記内容の多いバリエーションも存在する。



現在アメリカ軍が使用中のナイロン製ダッフル・バッグ。WW2当時のものと異なり、バックパックのように背負うためのショルダー・ストラップを追加。またバッグの側面にポケットを追加するなど、利便性を向上させているのが特徴で、サイズは高さ78、底面32×32cm。また今回は紹介できなかったが、バッグを閉じる方法を変更したタイプが別に存在。こちらは中田商店から「AS-861 米軍実物 改良型ダッフルバッグ/価格5900円」として販売中。(撮影協力:中田商店/AS-860 米軍実物ダッフル・バッグ/価格4800円)

フランス軍ダッフル・バッグ BAG,DAFFEL(FRANCE)

こちらはフランス陸軍が使用したダッフル・バッグで、基本的に第2次大戦中のアメリカ陸軍と同形。第2次大戦後の西ヨーロッパの各国軍はアメリカ陸軍の装備と同じデザインの装備を採用しており、このダッフル・バッグもその一つ。フランス軍だけでなくオランダ軍も同様のダッフル・バッグを採用している。(撮影協力:中田商店/EU-1290 フランス軍実物 フレンチダッフルバッグ/価格1980円)



マーキング

バッグの底に白いペンキでステンシルされたマーキング。戦術記号とも思われるが、詳細は不明。ちなみにフランス軍の戦術マーク(Tactical Symbol)は表方形で内側に兵科を示すシンボルが入ったものが使用されている。

スナップフック

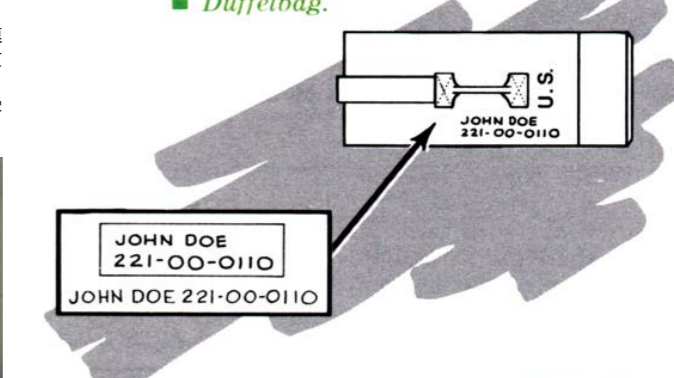
フランス軍ダッフル・バッグのショルダー・ストラップ先端に付く金具はアメリカ軍と同様のスナップフックだが、フック部分が回転式になっているのが特徴。このスナップフックは、雑糞やメディカル・バッグ等のフランス軍装備にも使用されている。



ダッフル・バッグへの使用者名記入位置

兵士は支給される装備に自分の名前と軍の認識番号を記入するように指示されており、その場所も装備ごとに規定されている。ここで示した図版は1977年版陸軍マニュアルFM21-15に掲載されたもので、ダッフル・バッグの場合はハンドルが縫い付けられた面の右下側に記入。色は黒で、氏名の最後の文字が“U.S.”の上に来るようにする。なお大戦中は使用者の苗字の頭文字と認識番号の下4桁を記入する(例:K-1958)ように指示されていたが、フルネームと8ケタの認識番号を記入したのも見られる。

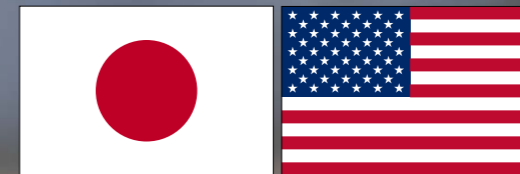
Duffelbag.



兵士に支給される装備は常に新品とは限らず、前持ち主の名前が入った中古が支給される場合もある。その際は元の持ち主のマーキングは消すように規定されていた。写真のダッフル・バッグは使用者名と認識番号を抹消しているが、次の使用者に関する表示はない。ちなみに完全に消すことが出来ない場合は、元の表記の上に同じ色で2本線を引くと規定されている。



フランス軍ダッフル・バッグのサイズは高さ70cm、底面28×28cmで、アメリカ軍のものより小さい。ここで紹介したのは60年代頃(?)のコットン製だが、現在では上で紹介した現用アメリカ軍ダッフル・バッグと同じデザインのナイロン製が採用されている。



陸上自衛隊水陸機動団、 米海兵隊31MEUと 連携訓練実施!

3/4～25日にかけて陸上自衛隊は
在日米海兵隊31MEUと
「令和3年度第31海兵機動展開隊との共同訓練」
を実施。最新装備である20式小銃や9mm拳銃
(HK FSP9M)を携行しての訓練に加え、
陸自第1ヘリコプター団輸送航空隊隷下の
V-22オスプレイも初めて共同訓練に
参加するなど、見所の多い訓練となった。

取材 神野幸久(航空ファン)編集部



STI

最後の傑作【前編】

僕が日本にいた頃、STIは憧れのブランドだった。しかし、アメリカに来てから分かったのは、STIは実は“そこそこ”のブランド力ということ。実際にレンジでSTIを箱出しの状態で使用しているシューターはほとんどおらず、知識の浅い初心者がSTIを購入して、そのままの状態で試合に臨み、作動不良を起こす場面をよく目にしたものだ……。

そんなSTIは2020年の春、その負のイメージを断ち切る為に社名を「Staccato（スタカート）」へと変更。競技用の銃を作るメーカーから、ボリス/ミリタリー関係者に向けて製品をアピールするべく、新たなスタートを切っている。今回紹介するのは、STIが社名変更の前に生産した最後のモデルであるSTI/TTIコンパクトマスターだ。

ジョン・ウィックの銃

ガンファンを狂喜させた映画「ジョン・ウィック:パラベラム」の劇中において、キアヌ・リーブス扮するジョン・ウィックが愛用するのがSTI/TTIコンパクトマスターだ。現行版はSTI製ではなく、TTIがプロデュースして発売を継続している。STI製は、コレクターズ・アイテムになっており、オークションで高額で取引されている。僕は、映画が公開された年に、パート2以降、ジョン・ウィック・シリーズにおいて銃器アドバイザーと射撃インストラクターを務めるタラン・バト

ラー氏のレンジにもお邪魔させて頂き、市販品のSTI製TTIコンパクトマスターの取材を行なっている。今回リポートするモデルは、市販品の9×19mm版ではなく、わずかに数挺しか生産されていない、40SWモデルだ。

口径.40SWの実情

.40SWは、9×19mmの威力不足を解消し、尚且つ.45ACPよりも反動がマイルドな口径としてS&W社とウィンチェスター社が共同で開発。威力不足に悩んでいたFBIが1990年代に採用した口径だ。ただ、近年では弾頭の形状や研究が進んだこともあり、9×19mmであっても十分に犯人の制圧に必要な威力を出せることが判明し、銃の耐久性や弾薬のコスト、運用面などを

チャー・ロードのルール基準として、最小口径を.40と定めている為だ。このルールの背景には、9×19mmで高威力の弾薬をロードすることに危険がともなうことと、国によっては、リローディングが禁止されており、市販の弾薬でメジャー・ロードの基準値に達する威力の弾薬が.40SWや10mmオート等、.40以上の大きさの口径ということがある。

STIとTTIが特別製作したこの1挺は、リミテッド/スタンダード部門で全米選手権、世界選手権で何度も優勝を果たしている“最強のアイアン・サイト・シューター”ニルス・ジョンナサンに提供されたものだ。

STI最後の傑作

僕が初めてこの.40SW仕様のコンパクトマスターをニルスから見せてもらったのは2018年の夏だ。翌年のショット・ショーで大々的に宣伝されて一般に公開されたSTI/TTIコン

考えても9×19mmが良いという流れになってきている。もちろん.40SWを使用している警察関係者はまだ居るが、.40SWは廃れてきた口径と言える。その様な事情から新たに発売されるハンドガンのほとんどが9×19mmで、市販品のコンパクトマスターが9×19mmのみになっているのも当然のことだ。

こういった世間の流れがある中で、USPSA/IPSCなどの競技では、未だに.40SWの需要は残っている。これはアイアン・サイトを使用する部門であるリミテッド/スタンダード部門がスコアリングの際にAゾーンの外側に命中しても高得点を得られるメジ

バットマスターだが、その数ヵ月前からニルスは特別に銃を提供されていた。これはタラン氏のマーケティング戦略の一環だ。競技実績が充分なニルスにUSPSA全米選手権で使用してもらい、リミテッド部門での優勝をかっさらい、その結果で競技界での宣伝をし、一般向けには“ジョン・ウィックの愛銃”としてプロモーションを行なう予定だった。しかし、ニルスは2018年の全米選手権ではJJ・ラカーザに敗れて2位に終わってしまった……。

V10 ULTRA COMPACT REAL STEAL Ver.



ハイグリップ・デザインの前ストラップに、30piのチェッカープレートタイプのグリップに交換して、チェッカーを活かすこともできる。



きれいに仕上げられたヘビータイプのマズル。厚手のスライド断面が、.45の強力なパワーを暗示する。

インデックス付きのハイライド・ビーバー・テール、ストレート・タイプのスプリング・ハウジング、フィンガー・チャンネル付きのラバー・グリップなど、戦術的な要素を持ったコンシールド・キャリー、V10ウルトラ・コンパクト。金属感溢れるリアルスチール・バージョンを採用して、装いも新たに登場だ!!



WESTERN
ARMS

SV INFINITY 6.0 GUN BLACK Ver.

●Photos & Text by SHOTGUN MARCY
☎ウエスタン アームズ
☎03-3407-5922
<http://www.wa-gunnet.co.jp>



MOS-18E/Special Force Communications Sergeant STYLE

特殊部隊通信専門

【MOSとは】 Military Occupation Specialtiesの頭文字を取って「MOS」と呼ばれるアメリカ軍における職種専門技能のこと。グリーンベレーは陸軍MOS特殊部隊18ナンバーに分類されたMOSを取得。18A (ODA指揮官候補校: Special Forces Officer/※以下Special Forces: SF)、18B (武器兵器: SF Weapons Sergeant)、18C (工兵: SF Engineer)、18D (医療: SF Medical Sergeant)、18E (通信: SF Communications Sergeant)、18F (作戦補佐情報: SF Assistant Operations and Intelligence Sergeant) や、もっとも高度な訓練を受けた18Z (シニア: SF Senior Sergeant) また特殊部隊資格取得前の18X (SF Enlistment Option) があります。12名のODA (Aチーム) は上記のMOSを持った隊員から集まり構成されています。



AN/PRC-117G (海外製ダミーモデル)

実物はL3 HARRIS製のマルチバンドネットワークマンパックラジオ。現在の通信兵が使用するマンパックとして定番アイテムです。四角い箱みtainなものは専用バッテリー。

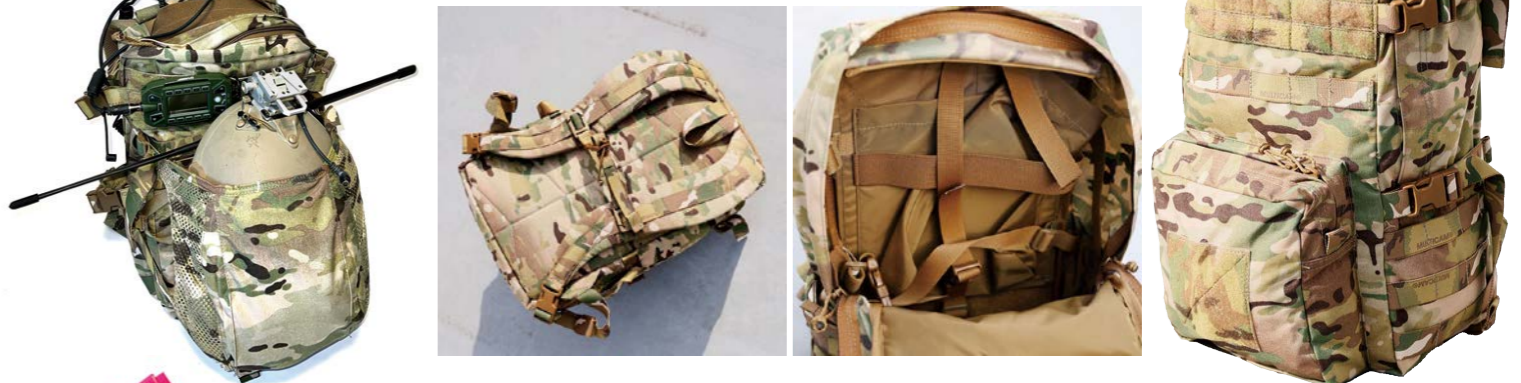
TRIVEC AVANT CORP製 AV2125 UHF SATCOM ANTENNA

軽量で折り畳み可能なので携行性に優れた240~318MHz帯域内で使用する衛星通信アンテナ。畳んだ際の大きさから「コートポケット」として知られています。手持ちとしても使えますが、三脚を展開すれば自立させることも。PRC152や117で使用可能。



MilisimFarEast製Multi Purpose Pack

2DAYサイズの日本製多機能バック。日本製?と疑問を持ったところだと思いますが、MFEが開発したこのバックパック。実はグリーンベレーでも使用されている...というより試作の段階で実際にテストしてもらい、そのフィードバックを基に開発されたという経緯があります。なのでGBお墨付きなわけ。そのテストしたGB隊員のMOSは「18E」となっており、今回の撮影同様PRC-117Gを携行。ラジオマンパックとしてベストマッチです。@Gearless



シグナルパネル VS17

視認性を高めるために高彩度なピンク/オレンジの配色になっています。ちなみにこちらは放出品で、小さめにカットされパラコードを縫い付けられています。友軍機に対する部隊位置特定や、支援が必要な場所を特定するためなどに使用。



SPIRITUS SYSTEMS製LV-119 (Over rt) をベースに、同社Micro Fight Chassis Mk4 (+Micro Fight Full Flap)、Expander Wing Mk2、MOLLE TUBES カマーバンド、SACK Pouch Mk3という組み合わせ。好みでパーツ構成を変更できるイマドキな民生プレートキャリア。支給品ではないですが、時折GBでも使用例があります。胸にはKAGWERKS GALAXY S9 KIT とINVISIO V60を装備。ラジオは現用では定番のAN/PRC-152A。



HARRIS FALCON III KDU

PRC117Gなどのマンパック操作を手元でできるようにする便利な画面付きリモートキーパッド。KEYPAD DISPLAY UNIT略してKDU。裏面にベルクロを貼って胸元に備えたり、付属のストラップを使って前腕部に着けて携行します。



ファーストラインは、独特な形状で身体にフィットしやすいBlue Force Gear CHLK Beltを中心にセットアップ。左から、サイリウム、AWS セーフティランヤード、そしてSOFLCSに含まれるTYR Combat Adjustable HAPPY Pistol / Rifle Mag、TYR Ordnance/Breaching Pouch Small Dump、メディックポーチはAWS Lo-vis Brow-Out Pouch。そこにITS製MEDICAL PVCパッチを装備。そしてGlock19を収めるのは、SAFARILAND 6354DOとなります。

TOKYO
MARUI

BOLT ACTION AIR RIFLE VSR-ONE

話題のタクティカル・ボルトアクション VSR-ONE「製品版」による最終レポート!

「エアソフトとしての性能に振り切った設計」で
ユーザーからの絶大な人気を誇る
ベストセラー・ボルトアクションライフル
「VSR」が、最新形状の
フォールディング・ストックをまとい
コンパクト&スポーティに大変身!
つい先日発売されたばかりの
製品版で改めて
その射撃性能を検証♪

Photo & Text by Takeo Ishii
株式会社 東京マルイ
☎03-3605-1113 www.tokyo-marui.co.jp
撮影協力 / BATON Range
<https://www.batonrange.com>

搭載されている純正オプションパーツ

- イルミネーテッド・ショートズームスコープ(3~9倍) 19,250円
- アキュラシーバイポッド / 10,780円
- プロサイレンサー(ショートタイプ) 4,180円
- プロサイレンサー(ナイツタイプ) 6,050円



第7師団 総合戦闘射撃訓練

去る2022年1月27日から29日および
2月1日から6日に渡って、北海道大演習場（恵庭市・千歳市等）にて
第7師団隷下部隊による「令和3年度総合戦闘射撃訓練」が行なわれた。
同訓練の中心となったのは、戦車を主たる装備とした第71戦車連隊および第72戦車連隊だ。
10式戦車や90式戦車を始め、大雪原を舞台に各部隊の装甲戦闘車両が咆哮を轟かせた！

第7師団は、日本で唯一、戦車を連隊規模で編成している。それが第71、第72、第73戦車連隊だ。3個戦車連隊というズバ抜けたスケールであるだけでなく、隷下の普通科、特科、施設科などもすべて装甲車化している。理由は戦車と共に戦うため。このように、第7師団は機甲科戦力を中核とした戦闘団を構成することから、別名「機甲師団」とも呼ばれる。その第7師団は、2022年早々に立て続けに大きな訓練を行なった。

まず、1月23日から28日にかけて「令和3年度第2次師団検閲」を実施した。訓練に参加したのは、第71戦車連隊および第7化学防護隊だ。そして引き続き「令和3年度総合戦闘射撃訓練」が行なわれた。第71戦車連隊は「令和3年度第2次師団検閲」が終了すると、そのまま1月27日から29日まで「令和3年度総合戦闘射撃訓練」へと突入。射撃実施日は1月28日だった。ここから予備日および日曜日を挟み、今度

は第72戦車連隊が2月1日から6日に渡って、同射撃訓練を実施した。射撃実施日は2月2日だった。このように、ひとつの射撃訓練のようで実はふたつのフェーズに分かれているのが、今回の訓練の特徴である。訓練名に“総合”と掲げているのは「諸職種で協同する」という意味だ。敵をせん滅するというシナリオのもと、第71、第72戦車連隊だけでなく、第11普通科連隊や第7特科連隊、第7施設大隊が共に射撃訓練を

実施した。たとえば1月28日の訓練。第71戦車連隊の10式戦車を中心に敵と戦う。敵を務めたのは戦車用の標的だ。撃ち返してくることはないが、統裁部が「敵がミサイル発射。結果、1台破損」などのように状況を付与する。あまり姿をさらすところもやられてしまうため、射撃しない時は丘の陰などに車体を隠しながら「10式ネットワーク」を使い、仲間の戦車と情報を共有していく。



一面真っ白な雪で覆われた北大演習場。そこで射撃を行なうのは第71戦車連隊の10式戦車。同部隊は10式戦車と90式戦車の混成部隊だ。